

認知症高齢者における前頭葉活性化に重きをおいた認知リハビリテーションの効果

稲山 靖弘 大谷章仁<sup>1)</sup> 松本祥平<sup>1)</sup> 植田浩次<sup>1)</sup> 井畑浩敏<sup>1)</sup> 西 幸宏<sup>1)</sup>  
宮島 千鳥<sup>1)</sup> 谷 正人<sup>1)</sup> 村田智恵<sup>2)</sup>

1) 聖志会 渡辺病院 2) ケアプランセンターわたなべ

【はじめに】 当院の通所リハビリテーションにおいても平成 20 年 7 月から高齢者の通所利用者に対して前頭葉を賦活する認知リハビリテーションを開始した。今回、開始後 4 年経過しており、利用者と非利用者との認知機能の変化を集積・分析し報告したい。

【対象】 現在、通所リハビリテーションには 57 名の方が週 1 回以上参加している。そのうち 25～37 ヶ月（平均 32.1 月間）以上継続している利用者 8 名（男性 4 名：女性 4 名）平均年齢 79.1 才（66～87 歳）HDS-R 平均  $18.1 \pm 4.6$  を利用者群として、非利用者で 16～43 ヶ月（平均 28.8 月間）外来継続している 8 名（男性 2 名：女性 6 名）平均年齢 78.9 才（66～85 歳）HDS-R 平均  $17.5 \pm 2.4$  を対照群とした。

【方法】 週 1 回もしくは 2 回、1 回あたり 3 時間 30 分の作業療法士による認知リハビリテーション（休憩時間を含める）を行った。認知リハビリテーションの内容：

①指体操 ②ひらがな並び替え ③条件しりとり④旗上げ等

利用者と非利用者の HDS-R の点数変化を算出し、二標本 t 検定（ウェルチ検定）を行ない有無を検定した。

【倫理的配慮】利用者には研究の主旨と個人が特定されないよう配慮を行う旨を口頭に伝え承諾を得た。

【結果】 現在（平成 23 年 12 月 1 日）の改訂長谷川式簡易知能検査の低下点数は、利用者群において  $0.3 \pm 5.4$  点、非利用者群において  $9.4 \pm 3.8$  であり両者の間には有意な差が見られた。（ $p = 0.0014$ ）

【考察】 従来から金子らは、前頭葉を活性化する訓練で認知症の症状の進行抑制を認めたと報告していた。我々は、同様の方法を用い、4 年前から初期の認知症の方に前頭葉を活性化する訓練を主に実施してきた。今回少数であるが、利用者と非利用者の方に統計学的に有意な差が見られた。このことは、前頭葉活性化認知リハビリテーションが認知機能の維持によい影響を示している可能性が示唆された。